

待てば待つほど去りがたく とんかつ腹の立ち待ちの列

「武士は食わねど高楊子^{たかやうじ}」だの「武士の子は、腹はへつてもひもじゅうない」などと片意地張る一方で、たちまち「腹がへつては戦^{いくさ}はできぬ」などと本音を漏らすのが、われら日本人。

「地腹」「太っ腹」「腹がすわる」「腹ごなし」「腹なおし」「茶腹・水腹」「朝腹の丸^{がん}葉^や」「腹が北山」「腹が鳴る」「背に腹はかえられぬ」「腹の皮がよじれる」「ほらわたが煮えくりかえる」「片腹痛い」「鳴る腹にたたりなし」「腹は借り物」「腹八分目に医者いらず」などなど、腹にまつわる言葉の数が多いのも、われら日本人がことのほか腹にこだわる民族であることを明かしている。

そんな日本人の「腹具合」を探るうえで、当節、もつとも研究に値するのが「とんかつ腹」。はたと思い当たる向きが少くないのでは？

——主人公は誰でもいい。

ある日、ふと思いついて、とんかつ屋に入ってみたくなった。運よく昼飯ラッシュの直前で、店の中はまだ空席の方が多かった。だが、ご当人が席に着いたとたん、あたかも彼が「招きネコ」にでもなったかのように、急に客が込み出した。



たちまち店内が満席になり、見ると、入り口のレジの脇には椅子がいくつか並べてあって、その待ち席もすぐいっぱいになり、そのあと、立ち待ちの列ができるようになっていくらかからなかった。そうになると、席に座って食べている方の気持ちが落ち着かなくなる。彼らがテーブルの方をうかがいながら、あそこはもう

帰りそうだと見当をつけていたら、「なんだ！お銚子を二本も追加して」だの「あの子供連れの若夫婦ときたら、なんと鈍感さだ！二人で話ばかりしていて、少しは子供が食べるのを手伝ってやったらどうなんだ」などと「腹の中」でぼやいているのが手に取るように見えてくる。食べている方も、こんなことならそば屋にでも入ればよかったなどと、味まで定かなくなってくる。

一方、じつと我慢の立ち待ち組の方でも、待てば待つほど、いまさうらナギやそばでは腹の虫が納まりそうもないような気分になり、ついには「何が何でもとんかつを！」となる。

その揚句、やっとなんかつにありつくくと、これが何ともこたえられないほど旨いのだ！